

恭賀新年



飛躍願い新年迎える
各地の表情
2023年 卯年スタート

we support!
RQ
災害教育
センター

MONTHLY

復興支援「すけさきた」

しんぶん

「東北に黒糖を送ろう!大作戦しんぶん」改め
「すけさきた」とは
宮城県登米市あたりの言葉で
「ボランティアに来たよ」という
意味である。

JANUARY
11
2023



(2023年1月4日 東北放送)

新たな一年のはじまり。多くの人々が待ち望む中、太陽が海から顔を出します。宮城県南三陸町の海岸では初日の出とともに虹も。「こっちに虹で、こっちに太陽で2023年はいい年にしたいです」



大人として次世代へ震災つなぐ決意新た 宮城・七ヶ浜の伝承団体1期生が成人式

(2023年1月9日 河北新報)



Fプロのメンバーと写真に納まる鈴木さん(左から2人目)。成人式の会場には瀬成田さん(右から2人目)もお祝いに駆け付けた
= 8日、七ヶ浜町の七ヶ浜国際村

宮城県七ヶ浜町向洋中の卒業生らでつくる東日本大震災の伝承団体「ぎずなFプロジェクト(Fプロ)」の1期生が8日、町の成人式に出席した。会社員鈴木寧々さん(20)＝七ヶ浜町＝は、震災で人が亡くなるのを目撃した衝撃で体験を誰にも話せなかったが、Fプロの活動を通して過去と向き合い、克服した。「大人として震災を知らない世代に伝えられるよう活動を続ける」と決意を新たにしました。

震災時は小学2年。下校中に地震に遭い、母親と高台に避難した時に地元を襲う津波を見た。その夜、被害を免れた自宅に物資を取りに戻った際、人が亡くなる場面に遭遇した。

人の声が出た近くの倉庫に近づくと、タオルにくるまって震える男性がいた。地震後に避難を呼びかけていた消防団員で、津波にのまれて救出された。ストーブが数台あつて暑かったが、男性は「寒い」と繰り返していた。そして次第に話さなくなつた。「大人は助けようとしていたが、私はぼうぜんとしていた。人が亡くなるのを見るのは初めてで、それから小学3年の記憶がぼやかない」

震災の体験を思い出すのも言葉にするのも怖かった。「過去を避け、心を閉ざしていた」向洋中1年の時、教員として赴任してきた瀬成田実さん(64)が授業で震災学習を始めた。

鈴木さんは「震災の授業が嫌で、早く終われと思っていった」と振り返るが、母親と祖母を亡くした同級生の双子姉妹の妹が明かした体験が心に響いた。「いつも明るく元気なので驚いた。私も話してみようと思えた」

震災学習後、同級生がFプロの前身団体を立ち上げた。勧誘を断っていたが、「勇気や前向きな性格がほしい」と考えて被災地ツアーや災害公営住宅居住者との交流会に参加し、中学3年で団体に加入した。

高校生になつてFプロを立ち上げ、双子姉妹の体験を基に子ども向け紙芝居を製作。幼稚園や小学校で上演してきた。メンバーは約30人。活動は高校卒業後も続け、先月には愛知県であった講演会で語り部をした。

二十歳を機に活動の幅を広げようと、防災関連の資格を取得する目標を掲げた。「Fプロを通し前向きで活発な性格に変わった。関わってくれた人たちに感謝し活動を続ける」と誓う。